博物館学雑誌第17巻第1-2合併号（通巻20号）9～24ページ 1992年3月

（論　文）

もう一つの博物館学を求めて

Searching for Another Museology

榊　原　聖　文
Seibun SAKAKIBARA

はじめに

博物館学に関する本は，『博物館学綱要』を始め，『博物館学入門』，そして『博物館学講座』，最近の『博物館学Ⅰ』等，既に多くの本が刊行されている。

そこには“博物館学とは何か”について定義的に記されたものもあれば，そうでないのもあり，また，“博物館とは何か”について明解に記されたのもあれば，そうでないのもあるが，著者によってその考え方は微妙に異なっている。このなかには多くの人の賛同を得ているのもあるかも知れないが，筆者はまた別の考え方をしている。

筆者の関心は，“博物館について，確かなことは何か”ということを着実に明らかにして行こうとするときに必要な，その根本となる“博物館学”をどの様なものとして考えるべきか。についてである。これまでの著述は，何かもどかしく，もっと簡明であってもよいと思うのである。そうでないために，博物館学の可能性や発展性を模索するうえで不便すら感じるのである。

本稿はこのような考えにもとづき，第1章「博物館学とは何か」で，博物館学の定義，博物館学の対象，博物館学の目的，博物館学の範囲，博物館学の方法について検討を加え，第2章「博物館学に関する諸説」で，在来の考え方に検討を加えたものである。

1　博物館学とは何か

(1)　博物館学の定義

ある本に，“文の定義”が200以上も記されているという(1)。このことは，対象についての知識が増えるにつれて新たな定義を必要とし，あるいは言葉によって定義するということ自体に，対象の持つ多様性を限定するという働きがあるからだと考える。また，定義は定義する人の立場をこよなく反映するものであるとも考える。

これらを考慮すると，博物館学はただ一つとは限らなくて，ほかにも存在するかも知れないことを考えさせてくれるのである。また，“博物館学は一つである”として定義し把えようとすることにではなく，ありうる可能性の一つとして定義し，その立場にもとづく可能性とその限界を追求していくことにあることを示唆しているようにも思えるのである。以下に記す事柄はこのような態度に基づいている。

博物館学の第1定義として，博物館学と博物館の関係を明白にするために，「博物館学は博物館を対象とする学である」と規定する。

この定義は自明にすぎるかも知れない。けれども，これまでの博物館学は博物館を完全に対象化しきってはいなかった。その結果，博物館学的研究の対象やその所在が明解ではなかったと考えるので，この定義によって常に意識できることを意図したものである。ただ，この定義は「博物館を対象とする学は博物館学である」ことを意味していない（これに関する事柄は後章で言及する）。

この定義の“博物館”が問題となるが，さしあたって最も博物館らしい博物館を対象とすることによって，次いで博物館に近いものを対象に取り込むことによって，“博物館とは何か”が概念的に明らかに

*さかきばら　せいぶん
連絡先　㈱トータルメテア
〒　東京都千代田区紀尾井町3－23　文芸春秋新館6 F

なって行くと考える。そこには，あるがままの博物館，伝統のある博物館も，新しい博物館も，優れた博物館も，他館の参考となる先進的な博物館も含まれてくるであろう。

これらの博物館が対象化されるとき，その博物館の諸行為や諸事態が次の対象となるが，これらを客体として詳細に把握するために，博物館学の第2定義として，「博物館学は，博物館に生じる諸事象の概念について明らかにすると共に，これらの諸事象間の関係概念について明らかにするものである」と規定する。

この定義によって，博物館を観察しているけれども，今のところ不便を感じないし，また，この様な考え方が適用できる博物館の諸問題が結構あるかも知れない，と考えている。

なお，この定義は，『大塚久雄　社会科学の方法―ウェーバーとマルクス―（岩波新書，1971）』の中の『「普遍的に妥当する関係概念（法則）」の追求と「普遍的（あるいは歴史的）な意義を有する個性的な事物概念」の追求（P. 48）』を参考にしたものである。

前記定義に“普遍的”という言葉を省いたのは，博物館的諸事象となる筈のもの，またその中の基本的諸事象となる筈のものに，普遍的という言葉にふさわしい疑いもなく確かなものは少なく，その時機ではないと考えたからである。

(2)　博物館学の対象

定義に記したように，博物館は博物館学の対象である。けれども博物館学の対象はそれだけではない。もちろん，直接的対象は“博物館それ自体”であるが，“博物館からの出版物”や“博物館についての書物”も一つの対象であり，“博物館に関連する様々なもの”も対象となり，そして“博物館学それ自体”も対象になると考える。そこで，これらについて検討する。

ア）　博物館について

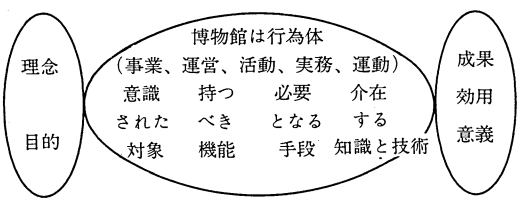
博物館を一個の観察対象として特定し，その全体的なものから個別的なものへとたどり，その構造を明らかにするためには，博物館を実体的なものとして把える必要がある。

そこで，博物館を一つの行為体として把え，その実務や実践を対象とするために，「博物館とは，この行為体が，種々の環境条件の下で，それぞれの理念のもとに，ある目的や目標を達成すべく，様々な手段や方法を選択しつつ，日々努力し活動しているもの」と規定したい。

この結果，各博物館の実務や実践は直接的観察対象となり，どの様な目的の下に，どの様な対象に，どの様な知識や方法，技術が必要となり，どの様な結果が得られているのかを，その行為にともなうものとして，明らかにすることができると考える。

博物館をこの様な構造を持った行為体として把える利点は，行為を更に細かく各構成要素に分解し易いこと，行為の遂行に介在する諸知識や諸技術との関係を把握し易いこと，また，行為に横たわる様々の障害や，行為にともなう様々の機能（プラスの，あるいはマイナスの機能）を検討でき，その結果として，博物館の実態を把握し易いからである。必要があれば，行為それ自体に博物館の価値を見ることもできるし，その成果に価値を見ることもできる。そこに歴史的現在を見ることもできれば，そのことの社会的波及効果も見いだすことができるかも知れない。また，博物館と他の機関が何によって区別されるかを，その類似点や相違点を通して比較することも可能だと考える。

在来の博物館学のなかには，≪博物館の目的を考え，それを達成するための機能があり，その実現方法がある≫との考えから，これを≪博物館機能論≫と名づけ，博物館学の体系のなかに位置づけているものもある。この考え方をとらない一つの理由は，“機能”は目に見えないために対象化しにくく思弁的になり易いからである。仮に，豊かな博物館的経験にもとづいた理論であっても，その実体的な部分を外化することなく，博物館の機能を論じるとき，原因と結果，データと結論の関係を追求する術を立てにくいからである。（第1図）



第1図　行為体としての博物館

イ） 実践記録について

これは博物館の実務や実践等の諸行為（調査研究，資料収集，保存管理，展示，教育普及，その他等）に関与した学芸員や，その他の人々が書き記した実践記録（Museography）を指していて，これは博物館学（Museology）の間接的対象にあたると考える。

博物館学（Museology）とこの博物館に関する実践記録（Museography）との関係については様々の解釈があり，最近では字句の違いにとらわれずに，これらを一つの博物館学として把えようとする考え方もある。この二つの言葉があることが，博物館学を不鮮明にしている原因の一つであると考えるので，両者の違いについて一つの考えを記したい。

ICOM の文献その他に，前者は理論を扱う，あるいは科学であるとして位置づけられていて，後者はほぼ技能を取り扱うと記されている(2-10)。多分事実であると思う。ただ，前者と後者の説明に，前者は博物館の幹部コースの人のため，後者は博物館の技術スタッフの人のためと記された文献がある（2-3)。そこにホワイトカラーとブルーカラーを区別した職能時代の名残を感じるし，その慣行のために，二つの言葉(Museology と Museography)のそれぞれが，異なる範囲をもっているのではないかと考える。

そこで，この範囲がそれぞれ異なるとする考え方について検討してみる。たとえば，“科学”と“技術”というときは，それは対象の違いにではなく，対象に対する関わり方の違いを指していて，前者は対象の性質を明らかにし後者は対象に働きかけるものである。博物館を対象として意識するとき，対象となるのは博物館の実務や実態等の具体的な事柄であって，そこから，“博物館とは何か”，“博物館はどの様な仕組みになっているのか”，“そこにはどの様な原理や法則，そして力が働いているのか”という様々な問いに応じて，その本質的内容が抽出され，概念化されたものが博物館学を形成する。一方，技術的対象として博物館を意識し，これをつくるために必要な事柄として網羅されたものは博物館技術学（仮に）を形成すると考える。そして，実際に博物館がつくられる際には，これらの中から最善の手段が，その館園の理念や目的にそって，またその他が勘案されて主体的に選択されている，と考える。したがって，前述の様に“理論と技術が異なる対象を取り扱う”とする考え方は不便である。

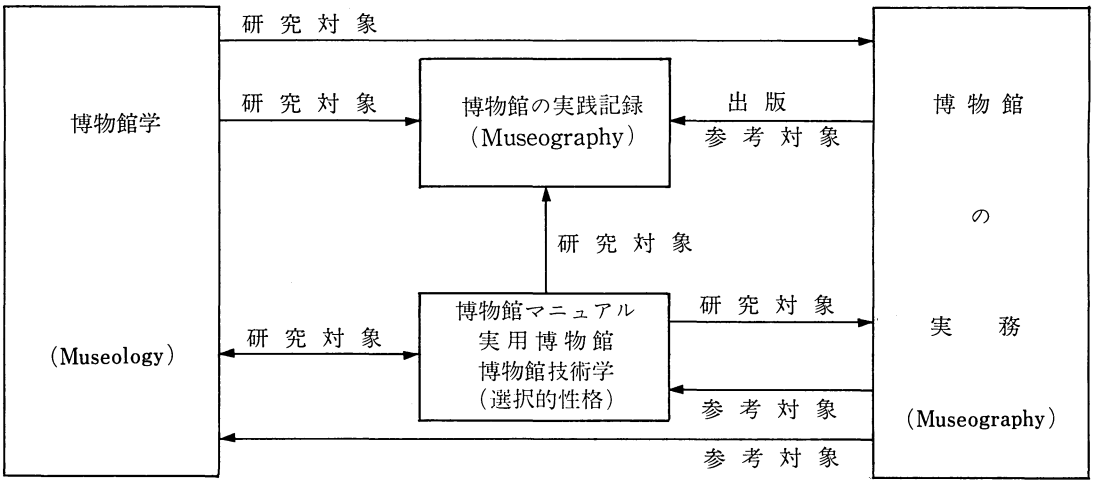
これらの関係をより明確にするためには，現に博物館で行われている実務や実践そのもの（Museography）と，その実践事実が記載されたもの，あるいはその集成されたもの(Museography)と，「博物館とは何か」を明らかにするためのもの（Museology）と，博物館をつくるためのもの（博物館学技術学あるいは博物館工学）とを区別しておく必要があると考える。

したがって，博物館学（Museology）と博物館実践（学）（Museography）は，博物館での実務（Museography）に関わる点では同じであるが，前者は客観的判断を目的とする記述であり，後者（Museography）は博物館の目的にそった実践事実の記述（それゆえ，主体的判断をともなう）であるとして区別され，また，博物館学（Museology）はその実践記録（Museography）をも対象とすることがあるが，後者は前者を参考にはしても対象とはしないところに，本質的な違いを見ることができると考える。

このように考えると，後者（Museography）は技術的な事柄だけに限定されるわけではなく，博物館における職務であるかぎり，その実務の全体を指すものとして位置づけられる。そして，博物館における実践や報告は，すべて実践記録(Museography)として取り扱うことができる。ただ，そのなかで，経営的なことと，技能的なこととが区別され，博物館以外で容易にみられる事柄が除外されることは起こりうるかも知れない。

なお，この両者に含まれない事柄としては，例えば“博物館はかくあるべきである，あらねばならぬ”という見地にもとづく提言や運動，“この様な展示装置が可能である”という技術的アイデアの提言などがあるが，これらの言説やアイデアは，学会誌（博物館学雑誌）や協会誌（博物館研究）などのしかるべき処に発表の場が確保されれば，目的を達すると考える。

そして，“博物館実務の構造や，留意すべき事柄，諸条件”が記された“博物館実務マニュアル”や“博物館技術”のような書物は，あくまでも博物館に働



（第2図） 博物館学と博物館・その他との関係

く人や，働こうとする人々，博物館を設計する人々の視点に立ったものであって，博物館学をより良くするための視点に立ったものとは距離をおくものと考える。(第2図)

ウ） その他の対象について

博物館の機能は，その全てが博物館に内在して成立しているわけではなく，市町村など規模の小さい博物館では，市の教育委員会や町の文化財委員などの努力よって資料収集がおこなわれている場合もある。また，博物館と博物館協会との関係，協会が関係機関や要路にはたらきかけていることの役割，学芸員と博物館学会との関係や，大学における学芸員養成講座との関係など，博物館はそれを取り巻く社会的連携システムのもとに存立している。一方，博物館が地域社会に及ぼす影響や博物館の社会的意義（社会的効用)，博物館に影響を及ぼす他の文化装置との関係なども，見落とすことのできない博物館学の対象であると考える。

これらを，博物館を中心において博物館とその外縁的な社会的システムとの関係を明らかにするときと，社会的システムの一つとして他の文化施設や文化装置との関係の中に博物館をおいて考究するときとでは，その目的も帰結されるものも異なるかも知れない。けれども，博物館が社会的諸関係のもとに存在している以上，その成果は“博物館とは何か”という一つの視座のなかに取り込める様な構造が博物館学には必要であって，そうでなくては完結的でないと考えるのである。

この点に関し，博物館社会学が存在すると説かれたものもあるが，社会学的観点や方法が“博物館とは何か”を明らかにする過程で用いられ，博物館学の視点の一つとして確立していく可能性も強いと考える。

エ） 博物館学それ自体について

博物館学それ自体を博物館学の対象に組み込むことについては，奇異に感じる人がいるかも知れない。しかし，博物館学についての多くの著述があること自体，そして，時に他の博物館学を批判したり，ある説が積極的に取り込まれていることなども，見方を変えれば，これらは博物館学が博物館学それ自体を批判することによって再形成をはかる営みであると考える。

したがって，以上記してきた事柄の全ては，博物館学の対象となると考える。

(3) 博物館学の目的

博物館学の目的については，多くの博物館学が≪博物館の目的を追求し，博物館のためにある≫とする考え方をとっている。しかし，博物館のためにあるとする考えを外すとき，国内ですら現在5000を越すともいわれている博物館(11)の多様であろう筈の理念や目的は，博物館学の研究対象の一つとして位置づけられることとなる。そこで，博物館学の目

的は，誰のためにあるのか，何のために必要なのかという点から，問いなおしておきたい。

博物館学の目的は，学芸員課程のためにあるとする見方も成り立つ。基本的には，博物館を，その実務を，その実態を知らない人のためにあるとする見方である。もしそれだけなら，既に記述したように，これまでに蓄積された膨大な実践記録や経験的知見が，体系的にわかりやすく整理されて，“博物館実務ハンドブック”や“博物館講座”として用意されていれば，用がたりる問題である。これを博物館学と呼ぶこともできるであろう，博物館学の当初の目的はそこにあったかも知れない。しかし，そうだとすると，博物館学は科学であるとする理由は必要でないと思う。これからさき多くの博物館にコンピュータや機械が設備されるようになり，その結果，その原理や取扱い方を学ぶための本が書かれ，それを“博物館技術（学）”と呼ぶようになったとしても，それを科学と呼ぶことは難しいと考える。

博物館学の目的は，そのような眼前することのためだけにとどまらず，その根底にある，この博物館を理解し，その（普遍的なものとしての）本質を追求し，博物館が抱えている矛盾を解明し，説明可能にすることであり，それに基づいて博物館とは何かを明らかにし，その可能性を探り，その結果として博物館に益することにあると考える。それゆえ，博物館学とは，これらの成果によって博物館学としての“博物館像”を，どこまで再形成できるかの営みであると考える。

この博物館学が科学であるべきだとすれば，その説明過程で科学的方法や科学的帰結が必要となるからである。また，科学であることによって，他の学術領域と地平を同じくして，その力を借りることもでき，何らかの寄与を他に成しうるかも知れないと考える。

博物館学は，この営みを通じてより良い博物館学になるので，博物館学はこの博物館を研究する人のために，そのために博物館学を必要とする人々のために存在し，そのために学会も存在すると考える。

この“博物館像をイメージ出来る”ことの必要性は，一つには現実の博物館と博物館学によって明らかにされる“博物館像”がどこがどの様に違うかを比較可能にするためと，一つには科学があびている批判“切り捨てられたものを見落とすあやまち”を踏まないためである。もしかしたら，博物館学の全体像は美しく・柔らかで・あらゆる方向に手を指しのべた千手観音のように，あらゆる可能性を秘めているかも知れない。

博物館の実態は一つであっても，博物館学の目的をどの様なものとして意識するかによって，博物館学は規範的であったり，実用的であったり，技術的であったり，科学的であったりする。これらが自己を確立し，分科するためには，それぞれの成熟を待たねばならないだろう。

多様化する社会的環境のなかで，いま博物館でどの様な実践が営まれているのか，その事実を踏まえ，それが博物館学としてどの様な意味を持つかを明らかにしていくことも一つの課題であると考える。博物館学として，成すべきことは未だ多いのではないだろうか。

(4)　博物館学の範囲

博物館学の範囲については，未だ検討された例を知らない。けれども，この範囲とその境界は，博物館学であったものが博物館学でなくなるところであり，博物館学やその本質的概念を，どの様なものとして把えるかということと深く関わってくる。もしも，これらが曖昧なときは，学としてのエネルギーも散漫になるので，この範囲を限定し明解にすることが，かえって，博物館学の活性化になると考えるので，少し検討したい。

博物館学の対象には，博物館で行われている全ての行為が含まれる。この博物館の行為には，博物館的なものとして見られている調査研究，資料収集，保存管理，展示，教育普及等があるが，この中には他の機関に共通に見いだされるものもあるかも知れない。また，博物館的とはいいきれない庶務や経理などの管理運営等のなかに，博物館的なものが見いだされるかも知れない。博物館という組織体は，基本的には，博物館的な事柄とそうでない事柄との有機的な関係によって成り立っている。

したがって，博物館学は，このことを踏まえた上で，博物館的行為や事象と一般的行為や事象と区別し，博物館学的知識としてどの様な事柄をどこまで取り上げるべきかが検討されるべきである。

ただ，これらを博物館学的知識として選択する際

の基準としては，何らかの根拠によって合理的に決まる場合と，みんなの協同作業によって合議的に決まる場合とが考えられる。しかし，このどちらで決まるにしても，その受け皿となる博物館学の目的や体系と無縁ではなく，したがって，次のような事柄についての態度を予め鮮明にしておく必要があると考える。

第一は，博物館学は学芸員の履修すべき科目の一つであるとする立場を支持するのか，それとも学芸員の履修すべき科目の総称であるとする立場を支持するかである。第二は，博物館学は，一般博物館学と専門博物館学とに区別されるとする立場をとるのか，それとも，そうではないとする立場をとるのかである。なぜなら，これらについての立場が異なるときは，博物館学として議論している筈の事柄が，その立脚点で大きく異なっていることになるからである。

筆者は，博物館学は学芸員養成講座の一科目として位置づけられるとする立場をとる。また，多くの館園に共通する事柄を取り扱う一般博物館学と，分野によって特化した事柄を取り扱う専門博物館学に分けるべきであるとする立場をとる。

この理由は，博物館で生起する事柄が，他の学術領域で確立した知識に属するか否かを区別しやすく，もしも他にみられない比較的博物館的な事柄であるときは，博物館学が明らかにすべき対象として浮き彫りにしてくれるからである。また，学芸員として専攻すべき学術領域と博物館学として履修すべき領域の役割分担も明解になると考えるからである。

例えば，ある研究者が，博物館で“もの”の本性を明らかにすべく化学を研究しているとき，その事自体は博物館学の対象となる。しかし，研究者が対象としている化学そのものは博物館学の対象ではない。これがたとえ考古学であったとしても同じだと考える。そうでないとすると，その違いを何に求めるのか，恣意的であるとの批判に耐える必要がある。

また，この研究者の専門的知識の領域と博物館に勤務することによって必要となる博物館的知識や技術の領域との境界は，どのようになっているのであろうか。

化学博物館や考古学博物館があったとすると，そこでは博物館学と化学が，あるいは博物館学と考古学が混在している筈である。学芸員はこれらを両立させているにちがいないが，それらがどのような時にどのような形をとって現れているかに注目することによって，その境界領域と，その境界を区別的にしている諸条件が明らかとなり，それを固有の場として認めるべきか否かが明らかになると考える。

もう一つ別の大きな問題としては，他の学問が博物館を対象とするとき，それが“博物館……学”として存在しうるか否かがある。これについては否定的に考えることもできて，これらの諸学の視点や方法その他が，博物館学のなかに博物館学的方法としてあるいは知識として分散して再形成されることも起こりうる。

例えば，博物館教育学は存在すると考えることができる。確かに，博物館には教育学の対象になるような学校教育の延長的な行為もある。だが，博物館においては，教えられるべきもの評価されるべきものとしての制約を持たない人々への，したがって，生涯学習と呼ばれていても教育学の範ちゅうには入りそうにない，情報の伝達・コミュニケーション上の問題として解釈可能な場合が少なくない。このような視座は教育学を逆照射するかも知れない可能性をも秘めていて，博物館教育学と言う古い枠組みを用いるよりも，新しい枠組みが用意されるべきかも知れないのである。したがって，この様な視点からの追求は価値があると考える。しかし，もっと調べていくと，実際には博物館的諸行為の個々の構成要素のなかに因子的に組み込まれてしまうものもあって，痕跡をとどめるにすぎない可能性もあるのである。

どちらにせよ，従来の博物館学による博物館的知識を仮に“内生的要因にもとづく博物館の知識”とし，他の諸学によって明らかにされる博物館の知識を仮に“外生的要因にもとづく博物館の知識”として区別するとき，後者は他の領域との差異性によって区別されるが，そこにはあくまでも外生的なものとして終始し，一つの領域を形成するものと，内生的知識と深い関係を持ち，相互に影響しあって，博物館学的なものとしての新しい視点を確立していくものとがあるように思えるのであって，個々の問題についての十全の検討を経なくては一概には言えないのである。

博物館学的知識の独自性は，社会的には認知されていないように見える。なぜなら，文部省令第9条に，学位を持っている人は必要な書類を添えて申請すれば，学芸員資格を授与される。このことは，学芸員に絶対的に必要な博物館学の知識が，他の学術領域の専門的知識で代替え可能なことを示しているのである。博物館学は単なる実務的知識を超えた固有の知識はないのであろうか。司書の資格に絶対的に必要な図書館学とすら，未だ比翼できない状態にあるとも言えるのであって，博物館学の核心に迫る研究がおろそかであることを物語っていると考える。

この現状を打破するためには，他の学術領域では追求しないであろう領域が何かを追究する必要があるのではないだろうか。

博物館の特殊性が何に依存しているのかを明らかにし，確立していない学術領域をみさだめることが，結果として，博物館学としての独自性につながり，博物館学の領域をより豊かにすることにつながり，その範囲も明解になって行くと考える。

(5)　博物館学の方法

博物館学の目的が博物館を知るためのものであるとき，知るべき対象となるのは，博物館の諸行為(資料の収集，整理保管，展示，教育普及，そして管理運営等）である。これらは異質の行為であるがゆえに区別されているが，そのどこに博物館に共通する本質がかくされているかは別にして，これらを理解し説明するための手段はいろいろである。

同じ目的のためであっても，そのための方法は異なることがありうる。目的が異なればその方法が異なっても当然である。同様にして，対象が異なればその性質を引き出すための方法も当然異なることがある。方法によっては，見えてくるものも切り捨てられるものもあるであろう。鶏頭を斬るに牛刀をもってすることの愚かさを突いた諺もある。これは，方法が目的や対象とは無縁ではないことを意味するが，博物館学にも共通するであろう。

博物館学として記されたものは，結局のところ“博物館についての知識”である。そこには“現実の博物館”が様々のフィルター（博物館についての直接観察によって得られるもの，博物館活動の直接的体験によって得られるもの，博物館をつくる過程で得られるもの，また，博物館についての記録や報告から得られるもの，観察者の想いや実践者の想い，博物館学を志向する想いや，そのための手段や方法）を通して一旦分解されたものとして，あるいは，博物館についてのより優れた説明が可能になるように再構成されたものとして示される。

この再構成された“博物館像”が（それが部分的なものであれ，全体的なものであれ)，博物館実践学などの“博物館についての知識”と異なるとしたら，異なる実践事実の膨大なる集積ではなく，学としての新たなる課題が見えてくる構造を必要としていると考える。

そのためには，知るための方法と知り得た知識が蓄積されていくような構造が必要であって，まず必要とされるのは，明らかにされていることと明らかにされていないこととが，明確になっていることであろう。出来れば，それらは普遍的な事柄でありたいが，はじめは，蓋然性の高い事柄が諸事実として明らかにされていくのであろう。学問とは，ある意味で，未知の事を既知の事に換える仕事だと考える。

そして，それが科学であるとするならば，この既知のものに要求されるのは，疑いを指しはさむ余地のないほどの確からしさと，その事の及ぶ範囲の確からしさを必要とするだろう。科学はその限定された確からしさのゆえに，その事の上に新たな知見を構築することを可能にしてきたし，未知の部分を特定できた。そして，多くの人々による一つ一つの微々たる確からしさの蓄積が長い科学の歴史を作ってきているからである。時としてパラダイムの変換があったときにも(12)，確からしさの故に批判を可能にしてきたし，変換も可能になったと考える。それ故，博物館学が科学ならばこのような微々たる確からしさの積み重ねが可能な構造を必要とするだろう。

緻密な科学においては，データとその推論とは区別されており，データそれ自体の確からしさも問題にされる。それゆえに，批判を可能にした。また，ブリッジマンの『現代物理学の論理』は操作主義として批判もされたと思うが，科学の客観性に寄与したことも事実であると，評価もされていた筈である(13)。博物館学が科学ならば，推論と同時に論拠も示されその筋道が納得しやすいことが必要である。

博物館学が科学になるかならないかは，これからの問題であって，最初から科学であるわけではない。

自然に科学があるのではなく，自然に科学をみてきたのであり，“質点の運動”に見られるように，科学的にみるためには知恵も工夫も必要とするのである。このことを考えると，科学的に説明しようとする努力なしには，博物館学は科学にならないだろう。

博物館学が科学であるとして，社会的に認知されていくとしたら，どのような過程をへて社会的に受け入れられ，あるいは科学化していくのであろうか。高島善哉「社会科学の成立」中村秀吉・古田　光編『岩波講座　哲学　科学の方法』(岩波書店，1971)には，

「第一の時期は，自然科学の方法モデルに従って社会科学が科学としての形態を整えた時期である。第二の時期は，このような自然科学的方法モデルにたいする批判と反省から，歴史的社会的なものに独自な方法意識の主張が行われた時期である。これにたいして第三の時期は，これらの二つの方法の綜合が求められた時期だといいうるであろう。」(P. 34)

と記されており，博物館学にとって一つの参考になるかも知れない。

このような観点から，博物館における諸事象を検討するとき，そこには科学になり易そうなものも，なり難いものもあり，用がたりれば取り上げなくてもよいようなものもある。勿論，科学になる部分がふえてくるにつれて，なり難い部分も科学になることはあるであろう。

ただ，人文系と科学系の人とでは，科学についての経験や知識，その考え方も異なるので，科学であると言うときは，その人が言う科学とは何かも問題になるであろう。これらについては，学会における協同作業を通じて共通の理解を確立していく努力が必要になると考える。

2　博物館学に関する諸説について

博物館学に関する本を調べると，博物館学の定義，その他から，博物館に対する博物館学の位置づけが，著書によって異なるので，これらについて記す。

(1)　棚橋源太郎『博物館学綱要』(理想社，1950)

博物館界に大きな足跡を残し，博物館協会誌の記者や編集にたづさわり博物館学に通暁しているはずの棚橋は，“例言で

本書が博物館施設に関する具体的な事例の殆んどを海外に採り，欧米博物館事業の紹介を主眼としているような嫌いがあるのは…中略…また本書が博物館研究に関し，その理論よりも実際的技術的方面の説述に紙面の多くを費やし，いささか学術書の型を破ったかの観のあるのは，

とことわり，Museology としてよりも Museography に徹した記述をとっている。したがって，具体的事例が多く，博物館学としての色彩は薄い。

(2)　鶴田総一郎「前編　博物館学総論」日本博物館協会編『博物館学入門』(理想社，1956)

本書は，前編と後編に分かれており，後編は博物館学各論となっている。本書は当時の博物館界に多大な影響を与えただけでなく，その後の博物館の発達にも少なからず寄与したと考える。また，その後の博物館学に大きな影響を及ぼしている。この著書には，

博物館学（Museology）は，一言で尽くせば博物館の目的とそれを達成する方法について研究し，あわせて博物館の正しい発達に寄与することを目的とする科学であると言える。(P. 10)
（下線筆者）

と記されている。この規定の特徴は，博物館に寄与することが目的に入っていることと，博物館が明確には対象化されていないことである。また，

博物館学の確立こそ今後の博物館に課せられた最大の使命である（P. 36）

とする考えは，当時は当然のことであった。

これらを考え合わせるとき，この定義は，博物館を船に例えると，同じ船上でその船の目的地や方法のあるべき姿を考える，と言うニュアンスをともなってきて，船外から博物館を把える立場は反映されていない。したがって，博物館の担い手としての立場と博物館学の研究者としての立場の違いが見え難いことである。また，下線の部分は，一つは博物館学が博物館に対して指示的性格を持つものとしての，一つは博物館学は結果的には博物館に寄与するものとしての，二様の意味解釈を可能とすることを，以降の博物館学から見ることができる。

「博物館学の方法」のところで，博物館学は「教育学の未開拓の一分野として存在し」ていると考えられていて，

「もの」を媒介とし，「それをおく場所」（施設と土地）を利用して，人間に「働きかける」（教育普及）というところにある。(P. 11)

と記されている。しかし，厳密には，博物館の本質や方法として捉えられるべきであろう。

この考え方は，本書を特徴づけるとともに，この著書の中心的概念である≪博物館学は，また博物館は，「“もの”と“人”との結び付き」を追求することにある≫の基礎になっている。

そして，「博物館の目的の機能的分析」では，“収集”，“整理保管”，“研究”，“教育普及”があげられていて，目的の結果的分析の対象として“博物館資料”，“博物館施設”，“学芸員”があげられている。そして，これらの具体的検討は，それぞれ「収集法」，「整理保管法」，「調査研究法」，「教育普及法」のところで展開されている。

この博物館機能論としての考え方は，すでに『文部省社会教育局編学芸員講習講義要綱1953（博物館研究 Vol. 36, No. 11, 1963所収）』の中にみられるが，その後，多くの博物館学で導入され展開されている。

本書は，以後，批判と参考の対象となるが，戦後の荒廃を背景に教育の場としての博物館の役割が切実であった時期であり，同時に，博物館を社会的に有意義なものとして確立させるための努力を必要とした時期でもあり，また，博物館学が博物館で研究されていた時代に書かれた背景を考えると，草創期における博物館学としての役目を立派に果たした本であると考える。

(3)　富士川金二『博物館学』（成文堂，1971）

本の構成と内容は『博物館学入門』によく似ている。しかし，博物館学についての考え方は異なるところがある。

博物館学という以上，学として形成される学としての研究対象と，これに対する研究方法とが確立され，さらに博物館学の根底をなす原理がなければならないことは…（p. 4）

と記されていて，博物館学は研究対象と研究方法，そして学としての基本原理が必要であることが考察されている。

博物館学は，どこまでも単なる技術ではなく，独自の科学として従来研究された諸事実と，また将来の研究に資するうえに，科学として組織立て体系づけられなければならないことは，博物館事業の社会的地位ないし，一般学術界に及ぼすべき効果の重要性からみて，学理として研鑽されその発展を期することを理念とすべきである。(p. 6)

と記されていて，≪学理として研鑽されるべきこと≫が鮮明にうたわれている。一方，「博物館学の目的」では，これをふまえながらも，

博物館学の理念をよく把握し，…中略…，博物館の理想的な運営の実現を目的としなければならないのである。(p. 8)（下線筆者）

と記されていて，『博物館学入門』より一段と，≪博物館の運営の実現を目的とするものとして≫の指示的性格づけが強調されている。

(4)　加藤有次『博物館学序論』（雄山閣出版，1977）

本書は，博物館学の理論的な面だけでなく，実際的な面についても記されていて，また，学芸員の養成に関することについても記されている。そして，博物館学的なことについては，『國學院大学博物館学紀要　第3輯　(1970)』の「博物館学史序説―博物館学に関する概念―」で検討されているが，これが第2章に収められている。

「第1章　博物館と博物館学」で，

博物館学とは，博物館そのものと，それらをとりまく社会とを含めて学問的体系をなすものであらねばならない。したがって，現行の博物館法が規定している範囲は拡大されねばならないもので，技術的な学芸員養成の充実はもとより，博物館の理念からして現代社会に適応させた博物館とするための努力がなされねばならない。そのためには，何よりもまず博物館学の確立が必要であり，実践的な博物館の分析をふまえて，理論的な体系化が必要とされよう。(p. 7)

と，博物館学への熱意が示されている。

学問としてこの科学を推進させるためには，博物館があることによって博物館学が成立するという関係が充分に認識されなければならない。(p. 18)

ことをふまえて，博物館学と博物館の関係については，

博物館学は，…中略…理想的な博物館を完成さ

せるための学問でなくてはならない。(p. 19),
(下線筆者)

と，指示的性格を帯びている。また，「第5章　博物館機能論」で

博物館学は，博物館の理念および機能・運営に関する問題追求のための学問である。(p. 88)

と記されている。

博物館の個別的機能については，「第1次機能(基礎機能)」として「資料の収集，整理保管，調査，研究」が捉えられ，「第2次機能（活用機能)」として「(In-door 機能）教育普及，情報提供機能，センター機能」と「(Out-door 機能）教育普及，体験学習，レクリェーション機能」があげられている。

本書の特徴としては，≪博物館の理念≫という概念によって，博物館の目的や方法をも含めて，これらの関係が検討可能になっていることである。

(5)　倉田公祐『博物館学』(東京堂出版，1979, 1990)

本書は9章からなり，博物館学とは何か，博物館とは何かを模索しつつ，各章の項目は具体的なものとなっている。特徴としては，「第6章　学芸員論」，「第7章　博物館社会学」，「第8章　博物館利用者」をあげることができる。第6章は『博物館研究』(1975, Vol. 10, No. 5)，(1976, Vol. 11, No. 4)，(1977, Vol. 12, No. 3) において，第7章，第8章は『博物館と社会』(共著・1972) で明らかにされている。

本書の特徴は，博物館学は博物館を科学的に追求する学である，として記されているだけでなく，個別的な問題についても，この観点から把えようとされているところにある。また，博物館を社会学的観点から捉えることの必要性を指摘し，博物館社会学の存在も説かれている。

一つの学問が本当に学問として形成されるためには，当然その学 (Wissenschaft, Science) が他の学問で代替できない研究対象 (Gegenstand) と研究方法 (Methode) を持ち，その学問の根底をなす原理を持つものである。(p. 4)

と記されていて，博物館学が学として形成するために必要な基本が示されている。

しかし，残念ながら，博物館学は，博物館全般に関する体系づけられた科学としてみるとまだ確立されているとはいえないであろう。(p. 5)
一言にいえば「博物館とは何か」を科学的に追求する学問であるといえよう。即ち，博物館学 (Museology) は，語義からいって，博物館 (Museum) の論理学 (logic) ということで，博物館の科学的理論付けである。博物館学は，その学問の対象とする博物館を料理する包丁である。…中略…良き博物館学つまり，博物館の理論，原理が良き博物館をつくることになるのはいう迄もない。
(p. 5)（下線筆者)

と記されていて，博物館が対象化されていることと，博物館学が科学的であることと，科学的に追求することとが，区別されていることである。博物館学と博物館の関係については，良い理論が良い博物館をつくることになると示されていて，納得しやすい。ただ，科学に関係する部分については，筆者は異なる考え方をとる。

要するに，博物館学という（科）学は，博物館の概念や理論構成に関する処理の仕方，操作の仕方を扱う科学的研究であるといえよう。(p. 5-6)

と記されている。

この文章からは，博物館学が方法論的要素に限定されるように読みとれる。けれども，科学は科学的知識と科学的営みより成立ち，科学的知識は具体的対象からその本質的概念が抽出され，その関係について記述されたものであり，科学はその理解過程における科学的思考や，方法だけに限定されるわけではないと考える。
また，次のような記述がある。

科学 (Science) とは，常に事実があり，先ず事実を観察することから始まる。…中略…。従って，博物館学は二つの問題を含んでいる。一つは現在ある博物館学は一体どんなものであるのかという問いと，他は博物館学はどうあるべきかという問題である。(p. 6)

と記されている。

ただ，科学は関心を向けたものについては客観的態度を必要とする。けれども，何に関心を向けるべきかを含まない。これは哲学であって，博物館学に関与する者にとっての研究態度や，持つべき問題意

識によって異なってくる問題と考える。したがって，“博物館学はどうあるべきかが常に問われるべきであっても”，そのこと自体は科学を意味しないと考える。

つづいて，

> 即ち，「博物館とは一体何であるか」を明らかにする学問であると共にまた，博物館の目的，内容，方法，組織はいかにあるべきかを探求し研究する学であるといえる。(p. 6)

と記されている。

しかし厳密には，科学は如何にあるかを探求するけれども，如何にあるべきかを追求はしない。科学の知識は善悪両用に使うことができ，例えば，辞書に記載された語彙のようなものであって，どの様な文脈で用いるかは人の問題である（，これが科学の限界，いまあびている批判の本質に関わるのではないかと思うが)。技術や工学は，限られた予算・人員・期間・そのときの技術レベルや効率など，様々な条件を考慮しながら，最適な形を追求するけれども，普遍的なものとして帰結されるわけではなく，データとしてどの様なパラメーターを入力するかは判断する人の問題であって，あるべきであるあらねばならぬとして存在しているわけではない。

「第7章　博物館社会学」において

> 博物館は一つの社会集団であり，他の集団との間に行動つまり社会関係を持つ組織(Organization)である。社会行動とは，他の組織とかかわり合い，他との関係を問題にすることであり，そこにその組織が占める役割（Role）と地位（Status)がある。つまり，ある役割を分担することで，それぞれ特定の地位が与えられ，特定の一に配属されていることに他ならない。(p. 166)

と記されている。

筆者はこの役割と地位という概念を，既設の博物館と新設の博物館の違いを考察する際の視点などにも活用している。この視点は非常に有効であるけれども，博物館社会学として独立するには，なお多くの時間を必要とするように思える。

この著書は，このような観点にもとづき，各章が“……論”，あるいは“……学”として対象化されている。ただ，第八章は“博物館利用者”となっていて，“……論”として昇華されていない。

(6)　新井重三「博物館学（理論）と博物館実践学」古賀忠道・徳川宗敬・樋口清之監修『博物館学講座，第1巻，博物館学総論』（雄山閣出版，1979）

本書は全10巻からなるシリーズの一つであり，当時の博物館学や，博物館実践についての考え方が結集されているが，博物館学についての考え方は，了解しにくい。

> すなわち，博物館論理学は「博物館とは何か，博物館はいかにあるべきか」という課題を追求する学問分野であり，一方，博物館実践学は，博物館論理学から結論づけられた学説にたって，その具体化を実践するために必要な方法論や技術論について研究し記録する記載科学的分野である。(p. 5)（下線筆者）

と記されている。また，次の頁で Museography について

> すなわち，狭義の Museology（博物館論理学）から求められた結論を実践するための方法や様式（技術）に関する研究分野のことである。(p. 6)

と繰り返されている。

しかし，この規定には無理がある。それは，博物館は博物館学がなくても存在していたし，これからも存在し続けるであろう。だから，もし仮に優れた博物館学があったとしたら，それを参考にすることがありうる関係におかれているのであって，それ以上のものではない。

また，この考え方に影響されるとき，博物館論理学の発達を待つまで（その正しさを誰が保証するかを別にして)，博物館実践学は研究できなくなり，もしかしたら，博物館学の低迷を招くおそれがある。“博物館は如何にあるべきか”とする考え方は，規範的なものがまぎれこみ易く，その時々の社会的状況と深い関係をもち，その確からしさは不安定であると考える。

(7)　間多善行『新説博物館学』（ジー・ツー，1983）

本書は3部からなり，第1部　理論博物館学，第2部　実践博物館学，第3部　博物館社会学，そして附録に“博物館学のための価値論”の章が設けられている。

これらのそれぞれは，次のような考え方で区別さ

れている。

第1はその研究対象の成り立ち，機能，本質等を理論的に追及して行く方法，第2は具体的に博物館の仕事や設備を研究する方法，この二つの方法はどちらも対象自体の内容を研究するのであるから内面的方法と名付けよう。これに対して，対象を外面的に，社会に於ける位置，役割等の面からアプローチする方法がある。

と記されている。第1部と第2部の違いは，このままでは区別し難いが，別のところで，

博物館を認識し，その認識によって理論を組立て，行動の基準を与えるのが理論博物館学であり，その基準に基づいて行動し，実際に仕事をするのが実践であるが，その実践の最良の方法を研究するのが実践博物館学である。(p. 85)

と記されている。

ここには，実践に対し，実践方法を研究するのが実践博物館学で，その行動基準となるのが博物館学であるとしている。行動基準と具体的実践方法がどの様にして整合性を持つかについては明解ではないが，これらの間に指示的関係を見ている，と考える。

本書は，基本的には先行するこれまでの博物館学の考え方を基調にしているが，注目されるのは，第2部実践博物館学のところで,「理想的な博物館あるいは博物館像はあるのか」という問いに対して，

博物館の固定した，普遍的な理想像というものはない，それは学者各自が主観的に自分の頭の中に描くべきものであって，客観的に与えられる理想像というものはない。(p. 84)

と記されていることである。

この考え方は，≪良い博物館をつくることを目的とする博物館学の理念≫と対立すると考えられることである。この立場をとる博物館学はこの命題にどのように対処するのか興味深い。

(8) 加藤有次「博物館学とは」加藤有次・椎名仙卓編『博物館ハンドブック』(雄山閣出版，1990)

この本の第1章が「博物館学とは」となっているので，検討する。この章の最初の節の「博物館学の可能性 (p. 11)」の最後の方で，

博物館学の存在は，人類社会に博物館の歴史的存在をみる限り可能性があるという前提条件から出発する。

と記されている。

筆者は別の考え方をしていて,“博物館学は存在しないと仮定し，否定しきれないと思われる問題”について，その可能性を検討していきたいと考えている。この二つの立場の違いは，博物館学をどの様なものと考えるかによって，それが存在するか否かについても，異なる答えがあることを示すのである。

「博物館学の目的とその論理形成 (p. 13)」のところで，

いわゆる今日に存在する「博物館」をより科学的に，そして人間社会の求める博物館像を確立することにある。要するに現代博物館の目的をより科学的に達成するために博物館学が厳存するといえる。(p. 13) (下線筆者)

と記されている。

同じ節の後半に，倉田氏の博物館学についての記述が引用されていて，それについて，

要するに倉田のいう博物館学とは，博物館の論理学であり，実践的技術学であることをほのめかしている。ここは筆者も同感するところである。(p. 16) (下線筆者)

と記されている。

ただ，前者の≪博物館をより科学的にすることにある≫との論旨と，後者の≪博物館学は博物館の論理学である≫こととは，論旨が異なると考えるが，異なる論旨について同感されているのか，同じ論旨として同感されているのか理解しにくい。

つづいて，前掲の鶴田氏の考え方,「一言に尽くせば…中略…目的とする科学である。」が引用されている。それについて，

まさにその論説の通りであり，博物館学の目的は，博物館の論理であり，それを達成する方法は技術にあると考える。(p. 16)

と記されている。

この考え方が妥当するか否かは別にして，ここには単なる博物館機能論からの脱却が試みられていることである。

博物館を作られるもの存立するものとしてみるとき，技術が浮かび上がってくる。しかし，技術の難易に関わらず，論理や技術は行為に介在するので，行為あっての技術である。それゆえ，筆者は行為を中心においた方が，特定された目的行為に対して，

別の技術や方法が可能となることなどについても説明がしやすいと考える。博物館学のキーワードとも言うべき“行為，機能，技術”に託されているものは，博物館学に何を期待しているかの射影と言えるかも知れない。

Museology と Museography との関係について新たな考えが示されている。

わが国において「博物館学」と呼称している内容は，

Museology
(理論)
Museum
Science—博物館学
Museography
(実践)

であり，…中略…，上記のごとく分析することができる。(p. 15)

と記されている。

この図式の意味は理解しにくい。Museology が科学であって，実践が科学でないとすると，Museum Science とは何であろうか。「博物館の営みは，(経験的) 実践だけでなく，理論も必要である」という意味ならば理解できる。けれども，Museology の上に Science をおくとき，ここでいう Museology の性格があいまいになる。同一著者の『博物館学序論』には，「学問としてこの科学を…」(前掲) と記されている。このように屋上屋を重ねても，従来の博物館学説の矛盾は払拭しにくいと考える。

(9) 矢島国雄「第 2 部　博物館—その理念・機能・役割」大塚和義著『博物館学 I —博物館の現在—』(放送大学教育振興会，1990)

本書は第 1 部と第 2 部に分かれていて，「第 1 部 博物館の現在」となっている。博物館学の定義的なことは，この第 2 部で記されていて，その「はじめに」のところに，「博物館学とは」と「Museology と Museography」とが記されている。

このように，博物館には実に様々なものがある。しかし，それらの相違を越えて，実は共通する理念に立脚するものでもある。

〈博物館学〉とはこうした博物館に関する総合科学なのである。(p. 80)

と記されている。Museology と Museography のところでは，

〈博物館学〉とは，さらにいえば，〈良い博物館〉とは何かを考え，それを実現させるにはどうしたら良いかを考えるものということができる。

と記されていて，良い博物館とは何かということと，良い博物館の実現方法を考えるのが博物館学であるとの考えが示されている。つづいて，

これを大きく分ければ，理念的な課題と，博物館に固有な技術的課題とに分けて考えることかできるだろう。(p. 80)

つまり，博物館の理念，その理念を実現する機能，そして博物館の果たすべき役割，使命を考えるのが〈博物館学〉であり，…… (p. 81)

と記されていて，『博物館学入門』の考え方に一脈通じるところがある。なお，

時として前者は Museology〈博物館学〉，後者を Museography〈博物館の技術学 (誌)〉と分けて考えることもあるが，ここでは〈博物館学〉を広い意味にとって，この両者を包括するものとして捉えておきたい。(p. 81)

と記されていて，Museology と Museography の持つ問題点を解消する一つの考え方が示されている。

これらの博物館学を検討して感じることの一つは，博物館学には二つの流れがあることである。一つは，『博物館学入門』をはじめとするところの≪博物館学は博物館の目的とするところを目的とし，博物館に寄与することを目的とする学である≫とする考え方であり，一つは富士川氏の博物館学の理念の一部や倉田氏の博物館学の基本姿勢にみられる≪博物館学は博物館を対象化してとらえ，それを明らかにすることによって，結果的に博物館に益するものであるとする≫考え方である。

前者の考え方は，『博物館学講座』において，博物館に対する指示的性格，その拘束性が最も強く示されているが，その後の博物館学は『博物館学入門』の考え方に近いものに回帰しているように考える。後者の考え方は，少数派である。

『博物館学入門』の当時は，博物館人が博物館学の研究者でもあった。現在は必ずしもそうではない。このような状況において，前者は博物館学としてどこまで博物館に対して指示的でありうるのだろうか，また，博物館がそれに対してどのような接し方をす

るのであろうか，今後，純粋に解析的な博物館学と実用的な博物館学とに，分科していくのではないかと考える。

これらの博物館学から感じることのもう一つは，“博物館の利用者”が対象化されていないことである。倉田氏の『博物館学』において指摘したけれども，他の博物館学においては取り上げられていないことのほうがおおい。

このように，利用者とは何かについての関心が少ないのは，博物館学だけでなく，博物館にも共通する問題かもしれない。この原因は，一つには利用者が不特定多数であり，把握しにくいこともあるけれども，もう一つには，博物館が教育施設であるため，これまで利用者を画一的教育対象として見なす傾向があったのかも知れない。しかし，博物館は利用者がいて成り立ち，利用者からみるとき博物館は一つの行動先に過ぎないことを考えると，利用者もはっきりと対象化され，その行動原理は明らかにされるべきであって，そのことによって，はじめて博物館が理解可能になる面があるのではないかと考える。

あとがき

本稿は，博物館学は博物館を研究対象とすることによって，博物館と関係しているということを明確にし，あるべき博物館像を追求する規範的博物館学と区別しようとしたものである。

そのために，博物館を観察可能な実体，行為体として把え，機能論を用いずに，博物館の基本的構造を把握できる方向を模索した。そしてまた，博物館学が科学であるにしろ，そうでないにしろ，多くの人が参加でき，誰でもが自分の博物館学を持ち，それぞれの博物館学が，共通する部分と異なる部分を，明解にしつつ発展することができるような，その結果として豊かな博物館学が形成されていくような，そのような理念と構造が博物館学には必要であると考え，“博物館とは何か”をまとめるためのものとしてではなく，“博物館とは何か”を再発見していくために必要な，その根底に関わる問題を検討しようとしたものである。

今後，より具体的な問題について検討していきたいと考えている。大方のご批判を仰ぐ次第である。

註

(1) 澤崎九二三『文（上）』（研究社，1971）P. 1
「1952年アメリカのFriesはそのThe Structure of Englishの中で，文の定義は200以上もあると述べている。」
と記されている。

(2) J. JELINEK『博物館学と博物館学各論—博物館における—』堀内三郎・山崎淳子訳（博物館ニュース，Vol. 9，No. 5，1974）
この本は，1965年に，ICOMの総会がニューヨークで開かれ，そこでは“科学革命”の言葉に象徴される急激な社会変化を背景にして，博物館訓練が主題になっていて，そこに次の文章が記されている。
(1)博物館学（Museology）—博物館理論的指導にあたるコース。ことに博物館の管理運営担当者のためのもの。
(2)博物館各論（Museography）—博物館活動諸分野の諸技術を扱うコース。これは博物館における専門技術者を対象とするもの。
（p. 7）
文中，“一般博物館学（General Museology）”，“特殊博物館学（Special Museology）”の記載があり，後者は（地質学のための博物館学，生物学のための博物館学，……など）を指していて，次のような定義がある。
A—一般博物館学。博物館学固有の課題の中核となるもの。
B—特殊博物館学。博物館における各学術部門への一般博物館学の応用を扱っている。
（p. 11）

(3) J. JELINEK「Museology and Museography in Museums」I. C. O. M.『TRAINING OF MUSEUM OF MUSEUM PERSONNEL LA FORMATION DU PERSONNEL MUSEES』（Hugh Evelyn Limited. 1970）First published in 1970
本書は上記(2)の原著であり，原文は次のようになっている
The theme is naturally divided into the following two parts:
(1) Museology—course of instruction in

museum theory. This is intended especially for executive museum workers.

(2) Museography—dealinng with the various techniques of museum work. This is intended especially for the technical staff of museums. (p. 23)

A－generaral museology, forming the core of the independent subject of museology;

B－special museology, to the individual branches of science found in museums. (p. 29)

(4) 鶴田総一郎「博物館学の目的と方法」国立社会教育研修所『講義資料47-1　博物館学―博物館職員講習講義資料―』1972.

の中に,

> 1985年の第3回国際博物館セミナーでは,この混乱をさけるため,UNESCOとICOMの共同提案で,国際的には次のような共通定義にしようと図り,承認された。(p. 10)

とあり,

> Museology and Museography
>
> Museology is the branch of knowledge concerned with the study of purposes and organization of museums.
>
> (Museology は博物館の目的と組織の研究を扱う知識の一部門。)
>
> Museography is the body of techniques related to Museology.
>
> (Museography は博物館学に関係がある技能の実体。) (p. 10)

が記されている。(　) 内は筆者

(5) ICOM 日本委員会「世界の博物館員専門教育訓練」(『博物館ニュース』Vol. 7, No. 12, 1972)

> ここで,ICOM の採択した次の定義をふりかえってみることは意義があろう。
>
> Museology は博物館の科学である。それは博物館の歴史と背景,社会における役割の研究,保護,教育,組織,物理的環境との関連の研究および異なる博物館の分類に関係するものでなければならない。
>
> Museography は博物館運営上のあらゆる方法とその実行をカバーする。(p. 4)

(6) ICOM『Professional training of museum personnel in the world』(PARIS I. C. O. M. 1972) (p. 6)

本書は上記(5)の原著である。その「Introduction」のところに

> It may be useful to recall at this stage the following definitions adopted by Icom:
>
> Museology is museum science. It has to do with the study of the history and background of museum, their role in society, specific systems for research, conservation, education and organization relationship with the physical environment, and the classification of differrent kinds of museums.
>
> Museography covers methods and practices in the operation of museums, in all their various aspects. (p. 6)

と記されている。

(7) G. Ellis Buraw「Museum Defined」『Introduction to Museum Work』(NASH VILLE 1981) p. 12

本書には(4)と(6)の定義文が一つにまとめて記されている。

> Museology is museum science. It has to do with the study of the history and background of museum, their role in society, specific systems for research, conservation, education and organization relationship with the physical environment, and the classification of differrent kinds of museums. (in brief Museology is the branch of knowledge concerned with the study of purposes and organization of museums.)
>
> Museography (is the body of techniques related to museology. It) covers methods and practices in the operation of museums, in all their various aspects (P.

12)

( ) 及び下線は筆者が付けた。

(8) 小学館ランダムハウス英和大辞典 1984 Vol. 3 p. 152

Museology：博物館学：博物館の組織・運営・機能などを体系的に研究する学問

(9) 『The OXFORD ENGLISH DICTIONARY』 SECOND EDITION p. 122

museology: The science of arranging museums. (museology は博物館を整備する学問)

museography: The systematic description of the contents museum.

(museography は博物館の収蔵物についての体系的な記載)

museographer: one who describes the contents of museums systematically.

(museographer は博物館の収蔵物を体系的に記載する人)

( ) 内は筆者

(10) 『Webbster's Third New International Dictionary』 (G. & C. MERRIAM co., 1981)

museology: the science or profession of museum organization, equipment, and management. (博物館の組織，設備，そして運営の学問または専門職)

museography: museum methode of classification and display.

(分類と展示に関する博物館的方法)

museologist: a specialist in museum work.

(博物館業務の専門家)

( ) 内は筆者

(11) 丹精総合研究所『季刊 ミュージアム・データ Museum Data』(No. 16, 1991.8)

「現在，日本の博物館は5000館を超え，さらに……」(p. 1)

の記載がある。

(12) トーマス・クーン『科学革命の構造』中山茂訳 (みすず，1971)

パラダイムは，新しい学派形成の出発点となった業績によって，以後それによって続く世界観の枠組みを指す言葉。ニュートンの業績に対するアインシュタインの理論など。

(13) ブリッジマン『現代物理学の論理』今田恵・石橋栄訳 (創元社，1941)

本書は4章よりなり，「第1章 広い見地」は2節よりなり，その第2節は「概念の操作的性格」となっている。

「元来，実験は現在我々の到達している以上に将来を予測し得ないことを認むるが故に，物理学者が絶えず自分の態度を訂正することを免れんとすれば，自然界を叙述し関係づける際に，現在の経験が将来を拘束せざる如き性質の概念を用ひなければならぬ。(p. 16)」

「操作的見地を採用することは，我々の理解する「概念」の意味を制約するのみならず，更に進んで我々の全ての思考の習慣を全面的に変革するものである。即ち，もはや我々の思考に於いて，操作的に充分に説明し得ざる観念を道具として用ふることを許さない。(p. 46)」

(14) 文部省社会教育局編『学芸員講習講義要綱 1953』

(博物館研究 Vol. 36, No. 11, p. 277, 1963所収)

「III 博物館の機能，A 博物館機能の推移，B 現代博物館の機能」